



『アジア音楽祭 2017 in 東京』 第1夜、室内楽の夕べに参加して

伊藤 美由紀

アジア音楽祭 2017 は、“Prayer”（祈り）をテーマとした室内アンサンブル、室内楽、電子音の3つのカテゴリーによる作品募集の中から選ばれた23作品による2日間4つのコンサートによる構成で、私は、初日の「室内楽の夕べ」に参加させて頂きました。

初日の会場である築地本願寺は、インド、西洋、イスラム、日本などの異なるモチーフを融合させた独自の様式を混合した外観の建築物であり、『お寺から発信する日本とアジアの文化』に値する空間でした。心配していた会場の音響も予想以上によく、室内楽に適した広さで、歴史を感じる厳格な建物のなかでの緊張感に満ちた音響空間になりました。

私の参加した初日の公演は、7名の作曲家による弦楽器、三味線、尺八を使用した室内楽でした。1曲目は、祈りを込められた美しいヴァイオリンの旋律から始まり、様々な主題が緊張感のある音響で変容していくチャン・ルー・ホアン（ベトナム）の3部からなる弦楽四重奏《戦争への祈り》。2曲目は、唐代の詩人の中秋の名月を愛でる詩の一節から引用されたリー・カー・タイ・フェーブス（香港）による《攸然是玉京》。ヴァイオリンとヴィオラにより不朽の月の美しさを描いていた。3曲目は、2016年にフィリピンで殺害された兵士の話からインスピレーションを受けて書かれたマリー・ジョスリン・U. マーフィル（フィリピン）による弦楽四重奏《カリムラン》（暗闇）。苦悩、孤独で悲痛な叫びを弦により表現していた。前半最後は、鍋島佳緒里による尺八、三味線による《センシェンス》（知覚力）。日本の楽器による音使い、時間感覚は、アジアの他地

域との違い、日本独自の美学を改めて感じさせた。後半最初は、冬の凍った湖を微妙な音響の変容で表現したヨンキョン・ホン（韓国）による弦楽四重奏《薄氷》。次は、拙作の尺八、三味線、チェロのための《枯涸の美（III）》。複雑なリズムの動きのなかで風鈴やりんも使用しており、残響にもこだわっている作品である。急遽、指揮者でもあるリー・イー・ウェイ・アンガス（香港）が、指揮を快く引き受けてくれ、短いリハーサル時間で緊張感のある作品にまとめてくれたことに感謝。最後は、リー・

イー・ウェイ・アンガス（香港）による弦楽四重奏《ジャローギンスキー断章》。副題に「攻撃性についての3つの研究」とあり、攻撃的な複雑な音響が切迫し構築されていく。

アジアのみならず、アメリカ、ヨーロッパで国際的に活躍しているアジア人作曲家による質の高い作品構成で、全7作品とも、完成度の高い演奏で緊張感のある充実した演奏会であり、参加できたことに心から感謝。アジアから世界に発信できる音楽交流が継続することを祈りたい。



室内楽の夕べ



左から3番目 筆者